

山寄謹哉先生を偲んで

原 澤 直 久



歴史地理学会の元会長であり名誉会員の山寄謹哉先生は、2011(平成23年)年4月30日、ご逝去された。1922年のお生まれで、享年88才であった。

先生は、京都五条坂の商家に生まれ、ご両親が早世されたため苦学し、兵役を挟んで立命館大学文学部地理学科を卒業された。

卒業後大阪府立の商業高校で教職に就いたが、その後、恩師藤岡謙二郎先生の紹介で専修大学の助手として赴任され、以後同大学の助教授から教授へと進み、退職後は名誉教授となられた。

京都で生まれ、京都の大学に学び、関西地方をフィールドとして古代歴史地理の研究を目指していた山寄先生に対し、ある日伊丹方面への巡検の道すがら藤岡先生から「東京の専修大学の助手へ行かへんか？」というお話があり、あまりに突然のことだったのでいったん保留にして後日承諾する旨返事をされたとのことである。1949(昭和24)年の当時、大阪の高校教師の月給は8,000円、専修大学助手の月給は4,000円だったそうで、大げさに言えば命がけの箱根越えであったものと思われる。

東京行きの前日に、平安神宮で生涯寄り添うことになる津留様との結婚式をあげてあわただしく関西をあとにされたのであった。その結婚式も、藤岡先生ご夫妻が仲人であったにもかかわらず、当日藤岡先生のご都合がつかず、同門の谷岡武雄先生が代役を務めら

れ、谷岡先生と藤岡先生の奥様によるご媒酌であったという。

東京では、専修大学の敷地内の建物に、福永忠一先生(後の文学部長)ご夫妻と同居されるという、今では信じがたいような新婚生活のスタートであったと先生ご自身が懐古しておられる。

関東に研究フィールドが移るとともに、関西・古代地理を中心としたそれまでのテーマから、古文書などの文献資料に基づく近世歴史地理研究に力を入れられるようになり、川崎市近辺の旧家を訪ねては、文書の発見と解読に明け暮れる日々を過ごされるようになった。おりから、1958(昭和33)年4月、日本歴史地理学研究会(歴史地理学会)の発足とともに入会し、学会の活動を通して浅香幸雄・菊地利夫両先生や事務局を長く務められた中田栄一先生など諸先生方と山寄先生との長い交流もはじまるのである。

私は、専修大学において1969(昭和44)年から山寄先生の薫陶を受けることになるが、山寄先生にはゼミと卒論指導をいただいた。山寄先生と歴史地理学会のご縁もあって、歴史地理学会の初代会長である浅香幸雄先生の歴史地理学の講義を1年間受ける機会を得た。山寄先生を通して多くの先生方から学ぶことができた一端である。

当時山寄先生は京都嵯峨野にご自宅をお持ちで、新幹線で専修大学まで通っておられた。こよなく京都を愛された先生にとって、京都在住・新幹線通勤は、相当なご苦勞を越えて至福の一時期ではなかったかと推察する。「退職したらやはり関西やな」とことあるごとにおっしゃっていたのを思い出す。そ

の後、東京都練馬区に移られ、一度転居されるが、同じ練馬区の大泉学園町に生涯お住まいになられた。

大泉のご自宅には何度も伺い、ご指導いただいたり、食事をごちそうになったり、さらには泊めていただいたこともある。その都度、奥様の手料理をごちそうになった。北関東育ちの私にとって、はじめて口にする奥様のすき焼きと京都風の厚焼き玉子には格別の思いがある。研究室で召し上がる先生の弁当には、いつも厚焼き玉子と特製のたれが入っていた。

先生の教え子に対するまなざしは優しく、苦学する学生に対しては絶えず手を差し延べ、相談に乗り、導いておられた。先生のお陰で今日あり、研究、教育、出版等社会で活躍する卒業生は数多い。大学における「人の教育」という一面を決して忘れず、しっかりと守り通す姿勢を持っておられたのである。

1978（昭和53）年からは長年立教大学にあった歴史地理学会の事務局を専修大学に移し、同時に常任委員長としてご活躍されることになる。在任中の1980（昭和55）年6月には、会誌を季刊の「歴史地理学」と改め、学会誌としてふさわしいもの（109号、全36頁）

とするなど歴史地理学会の発展の礎を築かれた。「会員通信」としてガリ版刷りからはじまり、その後「歴史地理学会会報」の名称で発行されてきた会誌であったが、この時期に会員数も増し、学会として大きく発展をとげたのである。1982（昭和57）年度からは会長として2期4年間を務められた。会長在任のころ学会の発展を話題にすると、先生独特のユーモアで「わしのは関西商法やから」と謙遜されていたことを思い出す。機関会員を募り、日本学術会議人文地理学研究連絡委員会に出席するなど、学会を通して大いにご活躍された時期であった。

平成13年6月には、名誉会員に推戴され、お亡くなりになられたのち、2011（平成23）年6月には、追悼の形で歴史地理学会功労賞が会から贈られている。

晩年は、ご自身も病気を得ながらも仲むつまじく奥様の看護にあられたことを伺い、先生の頑固なまでに筋の通った生き方とともに、ご家族をはじめ周囲に寄せる限りない優しさを感じ取ることができる。

ここに謹んで山嵯先生のご冥福をお祈りするとともに、教え子の一人として心からお礼を申し上げたい。

（写真は2006（平成18）年小口千明氏撮影）